

対馬方言1950年の調査研究

著者	堀井 令以知
雑誌名	研究論集
巻	73
ページ	171-187
発行年	2001-02
URL	http://doi.org/10.18956/00006374

対馬方言1950年の調査研究

堀井 令以知

本稿は1950年夏に現地調査した対馬方言についての未発表の記録である。

長崎県対馬の共同調査は、昭和25年(1950)に、日本言語学会、日本考古学会、日本人類学会、日本地理学会、日本民俗学会、日本民俗学協会、日本社会学会、日本宗教学会の8学会が連合して7月5日から8月20日に実施された。日本言語学会からは東京班として金田一春彦・山本謙吾・三根谷徹、京都班として泉井久之助・堀井令以知・奥村三雄、九州班として吉町義雄が参加した。対馬方言の音韻の研究を東京班が、対馬方言の語彙の研究を京都班が、対馬方言の語法の研究を九州班が担当した。その結果の報告は日本文科学会編『人文—特集 対馬調査—』第1巻第1号(昭和26年5月、有斐閣刊)に掲載された。日本言語学会の報告は64頁から85頁にある。それは、(一)総記 金田一春彦、(二)語彙調査報告 堀井令以知、(三)語法調査報告 吉町義雄、(四)音韻調査報告(1)音韻の部 山本謙吾・三根谷徹、(2)アクセントの部 金田一春彦の執筆である。

9学会(当時8学会)の連合調査は、その後も続けられたが第1回の調査に参加した思い出は半世紀を経た今も脳裏に刻まれている。その時に調査した多くの資料は、その1部を上記の『人文』および『京大特研会(大学院特別研究生の会)資料』の「対馬方言採集手帳から」(昭和25年9月)、堀井令以知『地域社会の言語文化』「第19章 対馬方言の語彙」(昭和63年3月、名著出版)に記述したのみで全般的調査報告は長く筐底に眠っていた。半世紀を経た今日、ここに発表するのは、調査記録のノートを整理し未発表の資料をまとめて報告しておかねば、1950年実地調査の方言記録は永久に失われてしまうことになると思ったからである。

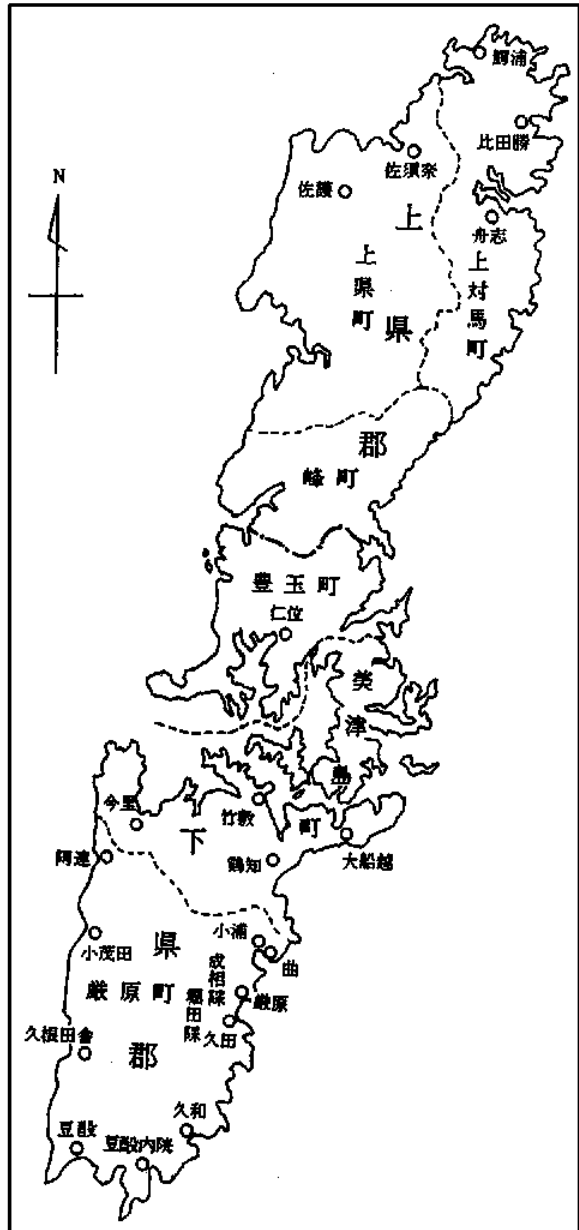
柳田国男は『海上の道』(昭和27年)の初めに、それぞれの閲歴を持ち寄った九つの学会が一致して日本の民族の生存を共同研究の対象としていることを喜ばれ、次のように述べられる。「他日我々の能力が充ち溢れるならば、無論次々に研究の領域を、海から外へ拡張して行くことであろうが、少なくともはまでの様に、よその国の学問の現状を熟知し、それを同胞の間に伝えることを以て、学者の本務の極限とするやうな、あはれな俗解は是で終止符を打たれるであらう」と。対馬の共同調査に先立ち、昭和25年6月25日に東京大学理学部地理学教室におい

て調査打ち合わせ会があり、私もその会に出席した。午前11時から泉靖一明治大学教授の司会で行われ、ミシガン大学調査班の参加のこと、科学研究費の配分、長崎県よりの補助金、福岡での宿泊、各班(24班)の連絡、名刺に八学会連合対馬共同調査委員会の調査機関名を明示することなどが議題になった。

1) 対馬の沿革

対馬の古い名称は都之萬(つしま)といた。『古事記』『日本書紀』には津嶋とある。海津の中にある島の意味からである。対馬の字は『魏志倭人伝』に記されるが、中国人は都志麻(つしま)を都以婆(ついで)と言ったので鎌倉時代から日本でも対馬の文字を当てたという。津島と書くのがよかったのかも知れない。古くは国府を下県郡厳原国分町に置いた。鎌倉時代になると少貳氏が対馬二島を管轄した。島の豪族であった阿比留国信はその命に従わなかったので、後醍醐天皇の寛元4年(1246)に宗重尚が国信を滅ぼした。重尚は地頭となり少貳氏に仕えた。壇ノ浦の戦いで入水した平知盛の子の知宗が難を避けて対馬に来たが、その子が重尚である。文永年間に蒙古が襲来したころ、

重尚の弟、宗助国が力戦の末戦死している。後村上天皇の正平年間、助国の曾孫経茂が初めて守護になった。後小松天皇の応永年間には経茂の曾孫、貞茂が上県郡三根郷佐賀に居住した。御花園天皇の嘉吉3年(1443)に、その子の貞盛は初めて朝鮮と貿易している。後土御門天皇の文明年間には、その孫、貞国は国府の中村(下県郡中村町)に居を定めた。後奈良天皇の享禄元



対馬 1950

年(1528)になると貞国4世の孫が與良郷金石(よらごうかねいし)、今の厳原金石を治める。その後、宗義賢は豊臣秀吉に属して州守となり、関ヶ原の合戦では西軍に与(くみ)したが朝鮮聘事の任にあったため封邑は変わらず、寛文6年(1666)には宗義智の孫、義眞は棧原(さじきはる)に移り住み府中と改称した。今の厳原である。厳原はもと宗氏10万石の城下町で対馬の中心地であった。

2) アクセント

対馬各地方言の調査に先立って、まずわれわれは厳原高校の生徒を対象にアクセント・語彙の予備調査をした。アクセントについては『人文』第1号に東京班の報告があるが、筆者は別に調査を実施した。

厳原では2拍名詞について第1類の牛・梅・顔・柿・風・金・口・竹・鳥・庭・箱・鼻・水・道は●○・●○△である。第2類の石・歌・音・紙・川・寺・夏・橋・旗・雪、第3類で第2拍の母音がイ・ウの語、足・犬・髪・雲・米・坂・島・耳は●○・●○△となる。ところが、第3類で第2拍の母音がア・エ・オの皮・花・山・鳥のような語は○●・○●△である。

第4類名詞の海・空・箸・笠、第5類の秋・雨・影・鶴はともに●○・●○△である。このように厳原は二型アクセントのタイプである。厳原と同じアクセントの地点は曲(まがり)・久田・小茂田・鶏知(けち)・竹敷・今里・仁位・比田勝・佐須奈・佐護・鰐浦であった。

厳原のアクセントに対して対馬南部の豆酏(つつ)のアクセントも二型アクセントであるが、厳原とタイプは異なる。第1類・第2類・第3類はいずれも○●・○●△である。第4類・第5類はともに厳原と同じく頭高で●○・●○△である。久根田舎・豆酏内院がこのタイプに属する。

厳原と豆酏のアクセントを比較すると、第4類・第5類の語は●○・●○△、第3類で第2拍の母音ア・エ・オの語のアクセントは○●・○●△と共通している。

今里などでは橋・箸・端の同音語はいずれも●○である。対馬では砂をズナというが、アクセントは佐須奈・鰐浦・今里・阿連では○●で、仁位・久根田舎・小浦は●○と各地で異なることも注目される。

3) 自然現象の名

風をカジェ、畦をアジェというのは鶏知(けち)である。瀬(暗礁)をシェと[ʃ]音になるのは豆酏のほか対馬各地で聞かれる。南風をハエ(仁位・小浦・竹敷)、東風をコチ(仁位・小浦)、北西風をアナジ(仁位・鰐浦・小浦・竹敷)、南東風をハエコチ(鶏知・小浦)という。ハエは『日葡辞書』にも記され、沖縄では「南」のことである。アナジはすでに平安時代から文献に現れ、アナは驚きの感動詞で、乾の方位を恐れた先人の意識が働いている。いうまでもなく、シ・チは複合語を構成する「風」の古語である。『対馬南部方言集』にもアナジが記載される。阿連(あ

れ)では南東の風をオッシュャナ、佐須奈でオシアナというが、オシアナジ(ゼ)の省略形でアナジに対して反対方向の風の名になっている。仁位では西風はシモニシという。疾風を佐須奈でオトシヤ、暴風雨はシケ(今里・阿連・鰐浦)・アラシ(仁位)、ヤマシケ(佐須奈)の語がある。

雷を[kaminar]のように語末の母音を落とすのは対馬方言の特徴である。カミナル(阿連・佐須奈・鰐浦)、カミナルサン(小浦)といい、船越では単にカミという。稲光はイナビカルである。

クラスミは外が真っ暗で部屋に光のない状態をいう(今里・鰐浦・竹敷・阿連)。阿連ではもっと暗い所をデーグデヤムという。これは大(デー)暗(グデ)闇(ヤム)からであろう。闇夜はヤムヨという。「ヤナ クレー バン ジャノー(大変暗い晩だな)」のようにいう。

4) 地形に関する語

土をツツ(阿連)、砂をズナ、泥はドロであるが、泥濘をビッチャリ(厳原・鶏知)、ビチャリ(今里)という。

埋め立て地はヒラキ(鶏知)で、ヒラ(今里ほか)は家の裏の傾斜地のことである。ハチロービラキのような地名もある。イエヒラは家の裏山の小高いところで丘ほど平らでない。佐須奈では裏山をヤマンヒラといい、鰐浦でハマンヒラは平坦になった墓地のことである。厳原でヒラは「丘」で、「お寺のヒラ」は墓地をいう。久田で寺の裏山をテランヒラという。

崖は陸地ではキルクン、海に面したところではオテギンと区別する。厳原でオテギンは断崖、小浦でオテギンは人間の通れるぐらいの崖地で、切り立ったのはガケという。仁位ではフチペラキン、久根田舎ではハタケノギンのようにいう。曲(まがり)ではオテギンよりも険しいところをキッテオトシ(阿連・久田も)という。阿連で西海岸のもっと激しいところをオービラという。今里では山島の傾斜地をキンペリという。

対馬のワミとサエは注目すべき語である。仁位では山の傾斜地をワミ、山懐・狭い谷間をサエという。阿連などでは[wam]と発音する。佐須奈では「深いサエジャ」のようにいい、谷間で平らな所がワミである。ワミは鶏知に多く仁位には少ない。サエは固有名詞として堀田隊・成相隊があり、小浦でも「～サエ」「～ノワミ」のようにいう。久根田舎で谷をコーチといい、ミズタゴーチの地名がある。ここでは、サエは小さい谷、山懐で、ワミはサエよりもわずかに大きい。

草むらをシゲ、シゲチというが、阿連にはナナシゲがある。仁位にも七岳七シゲと呼ばれる七つの聖山、七つの神聖な森がある。シゲは容易に入ることのできない所であり聖地であった。茂ったところを今里でシゲチヨリという。『対馬南部方言集』のシゲの項目には「風水の患ある地に接する樹木繁茂の森林に、天道地、シゲ地、祟り地等と言って名目を神にして尊敬せしめ伐採を禁じてあるものが州内諸所にある」と説明されている。

対馬各地で田畑に行くのをヤマエイク、ヤメーイク(鶏知・今里・阿連・佐須奈)・ヤマエイク

(仁位)という。小浦では「ドケ イクカヤ(どこへ行くのか)」と問われて、「ヤメーイコーガヤ」と答える。

久田で鼠をシマという。シマはもと一定の限られた地域のことであった。暗礁はシェ、シェー(阿連・久田)で[ʃ]の音が聞かれる。佐須奈ではウクシェである。入江を仁位でウラ、小浦・厳原でワダ、竹敷でナという。

樹木の穴をグロ(今里)、障子の破れ穴、節穴をホゲタマ(今里)という。鶏知で深い透き間をコゲタマという。豆酸で穴の空いたところをホゲンタマという。

井戸はツチー(阿連)、チチー(阿連)、豆酸ではツツン、久田でツツ・ツツンである。「包井」からの語で、周囲に垣をめぐらして勝手に汲めないようにした井戸のことである。

5) 動物名

牡を示すのにオネコ、オジカのように「オ」を付ける場合と、オトコイス・オトコネコ・オトコドル(小浦)のように「オトコ」を付ける場合、一方、メネコのように「メ」を付ける場合、オンナイヌ・オンナドルのように「オンナ」を付ける場合とがある。

鰯浦では雄鶏はオトコドル、雌鳥はオンナドル、男鹿はオガ、牝鹿はメガという。雄牛はコッテー(仁位・今里・鰯浦・佐須奈)、雌牛はオナメ・オナベ(仁位・今里・鰯浦)・ウナメ(佐須奈)で、子牛は雌雄とも一般にメーノコであるが、ベベノコ(佐須奈)ともいう。

仁位では牡馬はコマ、雌馬はダンマともゾーヤクともいう。今里でもコマとゾーヤクを使用する。今里ではダンマは軍隊語からという。佐須奈では牡馬をコマンマ、雌馬をダンマといい、ゾーヤクとは言わない。子牛は牡をコマゴ、雌をゾーヤンゴと区別する。阿連でもコマ、コマゴ、ゾーヤク、ゾーヤゴを使用する。久田では雌馬はダンマとゾーヤクを併用する。ゾーヤクは雑役の意味からである。もともと荷積み馬の意味であったフランス語の *jument* が、雌馬の意味に変化した事情と類似している。(拙稿「牝馬を意味する語について」フランス評論誌『流域』24号、昭和63年7月、青山社)

阿連などでは兎を[usang]、猿を[sar]のように発音し、語末の母音を発音しない傾向がある。狐は[kinne]という。鳥を[tor]といい、「トルガ巣をツクッチョ・巣をツクツツ」という。鶏を[niwator]と今里、阿連などでいう。

鼠を今里でオヒメサ(お姫さん)と呼ぶのは忌み言葉である。「オヒメサに御馳走あげよう」という。フクロウをヒクロードリ(今里)・ネコドリ(小浦)・ネコドル(佐須奈・鰯浦)・ネコブロー(阿連)のようにいう。

みそさざいを仁位でクソカッチョ、今里でクロカッチョー、小浦でカンチュッチュ・カンズズメという。ミミズクを佐須奈でシモヨビというのはシミと鳴くからだという。鳥の尻尾をシリホという。鹿を各地でシンというが、鰯浦では競争の速い男を「鹿見たいな男」と表現する。

6) 虫の名

蟻をアリムシというのは対馬の一般形で、今里・阿連では[a:rmuʃ]と発音する。蟬を鶏知・竹敷でゼミ、豆酸はシェミ・シェビ、阿連・今里ではミンミン、阿連でジュンジュンといい、鳴かぬ蟬はダマ、ユーシである。蜘蛛をコブという。

青大将をナガムシ、蝮をヒラクチ(敵原など)、小さい蛇をヒベカリ(阿連はヒベカル)という。蛙をビキ・ビキドンといい、トカゲをトカーキル、敵原ではトカギリ、豆酸はトカギルという。トンボをエンバ(敵原・仁位・小浦)、大きいトンボをトーエンバ、飛蝗(ばった)をハタウマ・キョウマ(鰯浦でトンムシ)、仁位でクツワムシをキョーマという。

カマキリはオガン、オガマニャトーセンと阿連でいう。仁位でカマキリをソーバツクリ・オガマニャトーサン(小浦も)、久田で小さい蛙をヒキ・ビキ(佐須奈でビキョー)という。鰯浦・豆酸・今里で蝶はチューチューであるが仁位・小浦はチョーチョーである。

7) 魚の名

仁位では大きい魚をイオ、小さい魚はサカナと区別する。仁位では大きい蟹をツガン、小さい蟹をガンといい、大きい海老はエビで小さい海老をエンビと弁別している。敵原で伊勢エビをエビカネという。曲で海老をエンビ、伊勢エビをエビカニという。鰯浦・佐須奈ではエビカネで小さい蟹はエンビ、鰯浦ではエンビは川にいる小さい海老のことである。

曲は有名な海女集落である。ここでは魚はユーという。ホシカリノユー(鳥賊)、タイノユー(鯛)、ジュンユー(旬の魚)のような複合形を作る。ホシカリはよく餌にかかるので「欲しかり」の意味からという。船越では魚をイオ単独では使用せず、タイイオ(鯛)のように複合形で用いる。今里ではイオをほとんど用いずサカナというが、タイノイオ(鯛)とはいう。甘鯛を敵原でクツナ(ちなみに京都でグジ、奥丹後でクジ)、竹敷ではガン(老蟹)カニ(普通)ガニ(大きい蟹)の区別がある。小さい亀はコーズで、大きい亀・海亀はカメといい、区別する。ツガニは毛の生えた大きい蟹で、カニは小さい蟹のことである。曲で鮑はイソモンという。

8) 植物名

小浦で松笠をツングリ、今里・阿連・豆酸・佐須奈でマツツングリ、敵原でマツノツングリという。ツングリは丸いものの意味で「松ぼっくり」のボックリと同系の語である。「綿の実」は各地でワタンサネであるが、豆酸はワンネサネという。

桑の実の方言は注目される。鰯浦・鶏知・今里・阿連はクワンミであり、豆酸はパジュン、パズンという。[kwa]と[pa]の関係が興味深い。ちなみに関東のトドメ、奥丹後のヒナビ・フナビ、京都府北桑田郡のスナベもクワツミに由来する同系の語である。

葛の根をカンネ(今里はクワンネ、鰐浦はカンネー)という。

今里で土筆をマツバグサ・マツバントー、鰐浦でマツツングルという。フキノトウをカンゾー(佐須奈・阿連でカンドー)、鳳仙花をソーレンパナ(厳原・今里)、ホトケバナ・トーパーナ(今里・小浦・阿連など)という。阿連で虎杖をズイコン、ズイコ(小浦も)、鰐浦はジーコ、佐須奈はチャドルである。

甘藷は対馬ではコーコーイモ(孝行芋)・コーコイモ・コーコモの形が一般である。豆酏ではコーコーイモを使用しない。豆酏はトンモ・トンボ(唐芋)という。朝鮮半島の南部方言は甘藷をコグマというから、対馬方言形コーコモが北上したものと推測される。(小倉進平『朝鮮語方言の研究』上巻、昭和19年6月、岩波書店、195頁の「甘藷」の項を参照)

9) 親族呼称など

仁位においては、父を士族出身者はトトサンと呼び、平民出身者はトトと呼んでいた。母を士族出身者はタタサマ、オタタと呼び、平民出身者はカカであった。

小浦では父をトトサマというのは丁寧語、トトヤンは普通語、トト・トツァン・オトツァンも用いた。ここでは母をタタサマ・タタヤンという。豆酏で子供が母をタタと呼ぶ。

竹敷で父をトトヤマというのは上流階級で、トトヤンは下層階級が使うが、高浜ではオトト、曲でトツァンという。母を竹敷でタタヤマ・タタヤンといい、高浜でオカカは悪いことばという。

鰐浦で父をトトサマ・オトツァン、母をカカ・タタヤン、佐須奈で父をトト、母をカカ・タタヤン(士族)という。

今里では父を士族はトトサマ、平民はトト(尾崎ではトトヤマ)、母を士族はタタサマ、平民はカカという。

阿連では父をトトサマ、トトヤン(士族)、母をタタヤン(士族)・カカサン・カカ(下層)、オッカサンという。

久田では父をトトサマ(士族)、トトヤン(農民)、母をタタサマ(士族)・タタヤン(平民)と使い分ける。厳原で母をタタ、丁寧にはタタサマ、普通はタタヤン・タタサンである。

仁位・今里で祖父をオジーサマ、祖母をパパスアマ(尾崎はオジヤマ、パバヤマ)、小浦では祖父をジーヤン、祖母をバーヤンというが、昔はジーサン、バーサンといった。阿連では祖父をジジー・ジジーサマ(士族)、祖母はパバ・パバサマで、ジーシュー、バーシューは卑語である。鰐浦ではジーヤン、バーヤンというが、昔はジーサン、バーサンといった。

曾孫をヒンマゴ(仁位・船越・阿連・佐須奈・鰐浦・小浦・豆酏)・ヒーマゴ(船越)、玄孫をヤシワマゴ(今里・佐須奈・豆酏)・ヤシバマゴ(今里)・ヤシマゴ(仁位・船越)・ヤシマンゴ(小浦)・ヤスマゴ(阿連)という。玄孫の子をツルマゴ(小浦・船越・阿連)という。

今里で兄をアンニャのほか、バポーサマ(士族)とバポー(平民)とを使用し、姉をアネサマ・ネノサマ(士族)、ネネ(平民)、妹をイモッチョ、伯父をオイヤン、伯母をオバヤン、従兄弟をイトコジョ、家族をキャネージュ、親類をイトコ、コドモウチという。

小浦で兄はアンヤン・バポー、弟はオトッチョである。姉をアネヤン、曲・佐須奈・鰯浦でネネ(「菊ネネ」のように呼ぶ)、妹を小浦でイモッチョという。小浦で伯父をオイヤン、伯母をオバヤンと「ヤン」を付けて呼ぶ。親類をイトコというが、小浦ではシンセキよりもシンルイの方が古形という。

仁位で兄を士族出身はアネサマというが、平民出身はバポーという。弟はオトッチョ、姉を士族はアネサマ、平民はネネ、妹はイモッチョ、伯父をオッサマ、伯母をオバサン、親類はシンセキという。佐須奈は伯父をバポー、伯母をベーパーという。小浦ではベーパーは、おばさんのことである。

阿連では女をオナゴ、悪いことばでメナと呼ぶ。夫をジジョー、妻をベーパー・ケネー、兄はバポー・アンサン、弟はオトッチョー、姉はアネサン・ネネ、妹はイモッチョ、伯父はオイヤン、伯母はオバヤン、佐須奈では伯父はバポー、伯母はベーパーという。『対馬南部方言集』によると、伯母・叔母はベーパー、旧藩時代の氏族の子弟を敬ってバポーサマ、兄・下僕をバポー、兄を敬ってバポージョーといったという。家族はケネージュ、親類をシンセキ・イトコ・コドモチという。久田では奥さんが自分の夫をバポージョーと呼び、夫は妻をベーパーという。兄をバポー、姉をネネ、妹をイモッチョという。豆酏ではベーパーの語は使用しない。豆酏でイトコジョーのようにジョーを付けると改まった感じがするという。

私生児をノゴ、佐須奈・小浦ではテテナンゴである。人倫関係の語には次の方言がある。お転婆はテンペーが対馬の一般形で、阿連でテンペーメナ、曲・鰯浦・佐須奈でテンペーネナといい、罵倒語である。曲ではテンペーモンという。

お世辞者を小浦・曲でチューペー、吝嗇者は仁位でヨクドーガン、今里・小浦でヨッガンドー、イシクジリ、曲・阿連・佐須奈ではガンドーモン、豆酏でヨクズラという。財産家は対馬一般にオヤカタである。乞食をホイト、聾啞者をユーン、センは本人、当人のことで「一応センに会うて」のようにいう。なお、病気をヤンメー、風邪を仁位でデーケ(咳気)という。

10) 身体の話

身体をカラダというほか、ゴテー(阿連・曲・佐須奈・鰯浦)という。「五体」に由来する。豆酏では腕をゴテーといい、手をゴテという。頭をノートー、ノーテン(今里)、カッポー(曲)、後頭部をボンノクソ(仁位・今里・阿連・豆酏)、ボンノクボ(竹敷)といい、佐須奈で頭の上の柔らかい部分をヒヒナ、額をヒテグチ(厳原・仁位・久田・豆酏)・シテグチ(今里・阿連・佐須奈)、眉毛をマヒゲ(仁位)・メーゲ(今里・阿連・鰯浦・豆酏)(豆酏では睫はメゲ)、毛髪をカミゲ(仁位

・今里・曲・佐須奈・カンゲ(阿連)、顔をツラ(仁位・今里・阿連)、目をメンタマ、耳をミム、唇をクチバ(仁位・久田)・クツツバ(今里・阿連)・クチュバ(曲)、頬をホータン(仁位・今里・阿連)・ホータブラ(豆酸)・カバ(阿連)、顎を今里でアーング・アギタ(鰐浦も)という。

舌をベロ(阿連)、首をガングビ、咽喉をノドンス、仁位でノドブエ、豆酸でノードノチチという。腹をドンバラ(厳原・豆酸など)、腕をゴテーというが、久田では身体も腕もゴテー、曲はテノウデ、肘をヒンシル(鰐浦はヒンシリ、豆酸はヒジシリ)、背中を豆酸ではセノクラ、尻をケッタブラ(曲はケッタプロ、鰐浦はシッタブラ、久田・豆酸はシリタブラ・ケッタブラ)、なお、豆酸はモモタブラ・ホータブラ・ケッタブラ・ムナタブラのようにタブラの形をよく用いる。肛門をケンノス、ケチンス(佐須奈でケツノス、豆酸でケツツノス)、臍をコーゲーズネ(鰐浦・豆酸など)という。コーゲーズネのコーゲは「甲掛け」の意であろう。曲はアシノスネといい、動物の脚はエダである。『対馬北端方言集』によると、エダは手・足・臍にいう。

膝をツブシ(佐須奈・厳原など)、指をイビ(阿連・鰐浦など)、鼻汁をハナダレ(厳原・阿連・佐須奈など)、鼻の穴をハナンス(厳原)、踵をキヒシャ(今里)のようにいう。膿をウン(鰐浦はウム)という。目の縁にできるものもらいをインノクソ、豆酸で伝染病をヤンメー、仁位で男陰をチンコ(久田も)、今里でチンボ、女陰をオメコ(久田など)・メメタン(今里)・オンナノタンコ(阿連)・サネ(今里)、月経をツキヤク(久田など)・ツキノモノ・ツキメグリという。

11) 衣食住関係など

副食物を仁位ではセー(曲・佐須奈・今里も)・オサイという。夕食を豆酸ではヨグチ、夕食準備をマグレジメー(阿連・曲も)、雑炊をゾーシー(阿連・鰐浦・今里・豆酸など)(曲はゾーセー)、刺し身はナマミ(阿連・今里・豆酸など)(鰐浦はナマン)という。トウモロコシをトーキビ(今里など)、大根をデーコン(阿連・豊など)・デーコ(今里など)、上記のように、甘藷をコーコイモ(鰐浦・小茂田など)・ココイモ(久田)・ココモ(今里・豊)、ココモ(阿連・佐須奈)という。この語は朝鮮半島へ入ってコグマとなる。豆酸ではコーコモとは言わないでトンモ、トンボという。唐芋の意味である。じょうせん飴をアメガタ(阿連・今里・鰐浦・豆酸など)(曲はゾーセン、佐須奈はジョーセン)、油はアルバ、飴玉をゴリンダマ、茸をナバ、カボチャをポーブラ(今里も)という。

仁位で着物はキモン(今里・阿連も)、曲でキルモン、鰐浦はキリモン、晴れ着をテーテーギモン(仁位・今里・阿連も)、テテギモン(豆酸)(貴い着物の意)、昔は晴れ着をイッチョーローソク(一丁蠟燭)といった。袖無しをチャンチャンコ、筒袖をハンチャ(今里)、女褌をヘコ(阿連・今里・豆酸も)(曲でイモジ、佐須奈でメゴンヘコ)、曲で越中褌をエッチューベゴ(今里でエッチベゴ)、襦袢をシメシという。

草履をジョーリ、豆酸でアシナカ、庇をキッカケ(阿連・鰐浦・今里など)、台所をデードコ

(阿連・鰐浦など)、炊事場をナガシ、風呂をユドノ、曲では竈をフロドコ(鰐浦でフルトコ、今里でフロトコ)、いろりをイルリ、いろりの主婦の座を今里でタナモトという。便所をセッチン(阿連・今里など)、庭先をカド(今里など)、土間をドージ(阿連・今里など)(佐須奈でドジョー)、陶器をヤキモン(鰐浦・今里など)・ヤクモン(阿連)、佐須奈で押し入れをオンゴム(鰐浦でも)・オシコミ(今里)・オシコム(阿連)、まな板をキリバン、五徳をカナワ(今里はカノー)、十能をヒカキ・オッカキ(今里・曲・鰐浦・阿連など)、箆をテボ、たわし(ささら)をソーラ(厳原・阿連・今里・豆殿など)(鰐浦はソール)、桶をタゴ(阿連・鰐浦など)、大きい桶はコガである。今里では水を汲む桶はミズタゴ(今里など)という。

盥をタレー(鰐浦など)、手水鉢をチョンダラ、籠はテボ(阿連で丸い籠)(今里でもいい、ナガテボは背負う籠)・ショーケ(阿連など)、曲でショーケ・テボ・ミソコン(今里も)のほか、魚を容れる四角い籠をバラという。鰐浦で大きい籠をスカルテボ、今里でオーショーケ、厳原でスカリは背負いかゴ(厳原でテボは円筒形の箆)、久田では平らな籠をソーケ、背負う(からう)籠をテボ・カレートボ、槌をサズ、阿連でドンズ、斧をヨキ(鰐浦も)(佐須奈・今里・豆殿でヨク、阿連でヨーク)・ボタヨキ(仁位ほか)という。曲で鋸にデーギリノコ・ワキノコ・ヒッキリノコの種類がある。豆殿で鋤をスクという。曲で茶碗をチャー(鰐浦も)といい、今里でゴク、佐須奈ではテモク、汁茶碗はシルジャー(今里)という。

佐須奈で火吹き竹をヒュークダケ、十能をオッカキ、槌をカケヤ、藁叩きをサッス、木槌を今里でサズ、鏡をカガム(阿連・今里・豆殿など)、大きい籠をスカルテボという。風呂敷を佐須奈でヒライタというのは注目される。

仁位では11月をシモツキ、12月をシラスなどと古名で言った。終日をヒガライチンニチ、終夜をヨーアカンという。隔日をヒシテビンテ・ヒシテガシニといい、豆殿はヒシテオキ・ヒシテカエシ(日にして返し)、午前中はヒンナカマヤ、午後はヒルカラである。

昨日はキノー、昨夜はヨンベ、一昨夜はキニョーバンである。夕方はヨーベという。

『対馬南部方言集』には、一昨日の晩をキニョンバンとあり、夕暮れをマグレヒグレ、マグレ、オテマグレ、暮れ方をモウモウドキとある。

凧はタコ、片足跳の遊びはスケケンという。お釣りを仁位でカジョーという。仁位ではキボクといって、亀の甲を焼き吉凶禍福を占う古来の卜法が残っていた。

12) 形容詞・形容動詞

形容詞は対馬各地で大差はない。用言は仁位・今里・阿連を中心に調査した。

大きい……フター(仁位・鶏知・今里・阿連)

小さい……チョッコメ(仁位)、コンメー・チョッコメ(小浦・鰐浦)・チンコメ(今里)・コメー(阿連)

- 多い…オエー(今里) 少ない…スクネー(今里)・スンネー(阿連)
- 厚い…アチー(今里・阿連)・アツイ(仁位)
- 薄い…ウシー(仁位・今里・阿連) 広い…ヒラタイ(仁位)・ヒレー(今里・阿連)・ヒラター
(今里)
- 狭い…セメー(仁位)・シェメー(今里)・シェペー(阿連)・セペー(小浦・佐須奈・鰐浦)
- 太い…フテー(「フテーキ」は太い木)(仁位・今里・阿連)
- 細い…ホセー(仁位・今里・阿連)・小浦・鰐浦)
- 高い…タケー(仁位・今里・阿連) 低い…ヒキー(仁位・今里・阿連)
- 深い…フケー(仁位・今里・阿連) 浅い…アセー(仁位・今里・阿連)
- 重い…オミー(仁位)・オムター(今里・阿連)
- 軽い…カリー(仁位・今里・阿連) 早い…ハエー(仁位・今里・阿連)
- 遅い…オセー(仁位・今里・阿連) 遠い…トイー(仁位・今里・阿連)
- 近い…チケー(仁位・今里・阿連) 値が高い…タケー(仁位・今里・阿連)
- 安い…ヤシー(仁位・今里・阿連) 熱い…アチー(仁位・今里・阿連)
- 冷たい…ヒエー(仁位・今里・阿連) 暖かい…ヌキー(仁位・今里・阿連)
- 寒い…ヒエー 「ヤナ ヒエー日やった」(仁位・今里・阿連)
- 旨い…ウメー(仁位・今里・阿連)
- 不味い…ウモネー(仁位・阿連)、サエン(仁位・今里)(豆酸でサエルは美味しい・サエンは不味い)
「サエルコッチャネー」のようにもいう。
- 甘い…アメー(仁位・今里・阿連) 苦い…アメーネー(仁位)・ニゲー(今里・阿連)
- 辛い…カレー(仁位・今里・阿連) 古い…フレー(仁位)・フリー(今里・阿連)
- 生の…ナマシー(今里・阿連) (生ものはナマモンという。)
- 熟した…ウンジョル 「このカキヤー(柿は)ヨー(よく)ウンジョル」(仁位・今里・阿連)
- 良い…イイー(仁位・今里・阿連) 悪い…ワリー(仁位・今里・阿連)
- 強い…ツエー(仁位・阿連)・ツイー(今里)
- 弱い…ヨエー(仁位・今里・阿連) 可愛い…エイラシー(仁位・今里・阿連)
- 憎い…ニキー(仁位・今里・阿連) 綺麗な…キレーニャ(仁位)・リッパナ(仁位・今里・阿連)
・小浦・豆酸)
- 危ない…アブネー(仁位・今里・阿連) 老いた…フケテアル(仁位)・フケ Chol(今里・阿連)
- 若い…ワケー(仁位・今里・阿連) 堅い…カター(仁位・今里・阿連)
- 賢い…リコーナ(今里・阿連) きつい…キチー(今里・阿連)・小浦)
- 肥えた…コエ Chol(今里・阿連) まじめな…マズメー(仁位)・マッスギー(今里・阿連)
- 騒がしい…ソゾーシー(今里・阿連) 「ヤカマシじゃないか」(仁位)

寂しい…サブシー(佐須奈・豆酸)・サベシー(今里・阿連)・コワイ(仁位)
 生意気な…ノフーズナ(今里) 忙しい…セワシー(今里・阿連)
 間違いのない…マテー 「あの人はマテー人だ」(仁位・今里・阿連)
 大儀な、やり切れない…オームネツク(仁位・今里・阿連)
 ぐったりした…ダラシー(仁位・今里・阿連)
 だるい…ダリー(仁位・今里・阿連) うらやましい…ハガイー(仁位・今里・阿連)
 気の毒な…キノドキー(今里・阿連)・スマン(仁位・今里・阿連)
 痒い…カイ(仁位・今里・阿連)

13) 動詞

与える…ヤル(仁位・小浦・鰐浦)・クレル(仁位)・クルル(今里・阿連・豆酸・曲・鰐浦・佐須奈)「オマエ クルルバヤ」(佐須奈)のようにいう。クレルは相手に物を与えるの意味で使用する。

集める…アツメル・ヨセル(仁位・今里・阿連)(アドメルともいう『南部方言集』)

歩く…アユム(久田・阿連・豆酸・佐須奈・鰐浦)アユムは上代から用いる古語。

徒歩で行く…カチカライク(豆酸・久田・小浦・鰐浦)カチは『万葉集』にも「徒歩」の意味で用い、「～カラ」は手段を示し、「～によって」を意味する。豆酸ではアルキエル、デキエル(できる)、イキナサル・イカルルの表現がある。

居る…オル(仁位・今里・阿連) 居ない…オラン(仁位・今里・阿連)オランジャッタ(仁位)、オラザッタ(今里・阿連) 豆酸で「ムシ(蚊)カオラザッタラヨカロー」(虫(蚊)さえいなかったらよいのだが) 佐須奈で「氏神様オイザッター」、「アラシャイマセ」という。「今飯がデケオル(進行形)」

からかう…ヒヤカス・セカス(仁位・今里・阿連)、セレバカス(今里・阿連)

動く…イゴク(仁位・今里・阿連) 歌う…ウトー(仁位・今里・阿連)

負う…カロー(仁位・今里・阿連・久田・佐須奈) 豆酸では肩にかついで行くをカツグ(継続)と一時的にかつぐ意味のカタゲルを区別する。「背負う」をカラウ。途中で雨に遭うを「雨カロータ」という。

実が落ちる…アエル(鰐浦・小浦・豆酸)(落とす…アヤス)・アユル(佐須奈)・オテル(小浦)・オツル(曲) 『対馬南部方言集』によると、アエルは「樹木が暴風に遭って枝葉が萎む」の意味で、「雨がアエル」は小雨が降るの意。

投げる…ホタス(仁位・今里・阿連)・ホタル(今里・阿連・小浦)・ナグル(阿連)

驚く…ビククリスル(仁位・今里)・タマガル(小茂田・阿連)・タマグル(今里)

買う…コー(今里・阿連) 買ってきた…コーテキタ

- 借りる…カル(今里・阿連) 借りてきた…カッテキタ
 孵化する…カエル(仁位)・カール(今里) 他動詞はカヤス
 大根などを切る…ハヤス(豆酸)
 腐る…ヨワル(仁位・曲)・ネマル(今里・曲)・クサル(今里・阿連) 魚肉などの腐敗するのをヨワ
 ル、飯や煮物の腐敗するのをネマルという。
 行く…クル(仁位) 目標点があるときはイクをあまり使わない。「遊びにクルから」(仁位)
 久田では向こうに行って直接話すときにはクルを使用する。到着点が分かっているとき
 である。イクは相手が分からないときに「府中にイク」のうようにいう。敬語の
 「来られる」に当たるのはケラル、コイラルという。
 交換する…カエル(仁位)・カユ(阿連)・カヨー(今里・阿連)
 叱る…ガル(仁位・阿連) 叱られる…ガラレル(仁位・曲)
 つべこべ言う…チューペーユ(豆酸) 座る…アイドル(仁位・今里・阿連)
 蹴る…ケマツレル(豆酸) 豆酸では蹴ると言わないで、ケマツレルという。
 病気になる…イタム(仁位・今里・阿連・久田) 「イタンジョルゲナ」(今里)
 死ぬ…ガネル(阿連)(罵倒語)・シヌル(久根田舎)
 煮る…タク(厳原)「味噌汁をタク」「芋をタク」という。
 掘る…バル(仁位・今里・阿連) 畠を耕す。鍬で土を掘るをバル、掘り返すをバリカヤスとい
 う。ホルは深く掘るの意。豆酸で三つ又や鋤で掘る。
 目が覚める…オドロク(仁位・今里・阿連・小浦) 夜眠っていて急に目が覚める。「赤ちゃんが
 オドロク」
 潜る…カツグ(鰐浦・曲)・カセグ(曲)
 許す…コラエル(今里)・コラユル(阿連) 酔う…ヨー(今里・阿連)
 叫ぶ…オラブ(今里・阿連・豆酸) 笑う…ワロー(仁位)

14) 助詞・助動詞・副詞・接続詞・感動詞・代名詞など

- ～から[接続助詞]…ケー(仁位・久田・豆酸・曲)「冷(ひ)えケー 火を焚こう」「暑いケ休もう」
 「暑(あつ)ケおられん」「今夜ヒエーケ雪が降るじゃろ」豆酸では「この米高いテ」とテ
 を使うが、カラの方がいい。
 ～けれども[接続助詞]…ケンドン(仁位・鰐浦・久田・小浦・曲)「いいアンペーソーじゃケンド
 ンそうするパイ」(鰐浦)「雨が降るケンドン行こう(久田)」ケド(仁位・豆酸・小茂田)と
 もいう。「雨が降りよったケドヒユリ(日和)になった」久根田舎の会話「アヤドン(あな
 た)ミムがトユーシテ てんで会ってわならんケッドモ目は達者なもんです。いついてみて
 んタイソー喜んでくれしゃりました」

- パッテを使用する地域(仁位・佐須奈・鰐浦)もある。「キチケ パッテ(疲れたので)休もうや」
豆酸では「よう見たケードモ分からん」のようにいい、昔からパッテンを使用しない。
- ～より[比較の基準を表す助詞]…～カラ 豆酸では「花カラ団子がいい」とヨリの代わりにカラを使用。「この子カラあの子がいい」ともいう。佐須奈では「花ヨリゃ団子」とヨリを使用する。
- ～か[文末助詞]…パイ 「ジーにも会うチキタ(会ってきた)パイ」 ソーパイ(久田)・ソーパヨ(豆酸)、豆酸で、「博多行くパイ(ていねい)・イクタイ(対等)・イクザエ(悪いことば)「オリャ モー イクザエ」、佐須奈で「行くバヤ」「今日仁位にイチョッタパイ」「イチョリマシタイ(優しい)」「ペーペーに会うチキタケンドン ミムがトユーしてハナジャー マルデ デケンザッタ」
- ～も～も…～ヤ～ヤ 「芝居ヤ花ヤ見た」(鰐浦)
- 大変[副詞]…ヤナ(仁位) 「あの女はヤナ クレー(黒い)」「ヤナ ヒエー(寒い)日ヤッタ」
- 行こうよ…豆酸で「イコーニャ(ネヤ)」 ～ガヤ「行くガヤ(行くか)」
- いいえ[応答詞]…ンニャ(仁位・曲・佐須奈)・ンネ(小浦)・イヤ(鰐浦)
- はい[応答詞]…ハイ(仁位)、ヘー(仁位・小浦・曲・佐須奈・鰐浦)・オー(目下に)(仁位・小浦・佐須奈)『対馬南部方言集』には、シーは貴人に応える返事とある。
- ～なかった…～ザッタ(敵原)「分からザッタ」「せザッタ」「行かザッタ」
- 少しだけ…チットバーカ(仁位) どうぞ…ハイヤー(仁位)「ハイヤー アガランヤー」
- どうもこうも…ドーンコーン(仁位) いつでも…イッデン(今里)
- いつもかも…インモカモ(今里) そんなに…ソゲン(今里)
- すっかり…シャント(今里) 時々…トッドッ(今里)、トークドク(曲)
- 再々…セーセー(今里)
- なぜ…ナンシテ・ナシテ(仁位)「ナシテそう言うのか」
- どうしよう…ドーゲーショー(仁位)・ドケンショー(今里)
- わざわざ…ヤカヤカ(仁位・今里・阿連) よい具合に…エー グエン(今里)
- ようやく…ヨーヨン(今里) もしもし…モンモーシ(仁位)
- 一人称代名詞…オレ(男)(仁位・今里)・オンド(女)(仁位・久田・佐須奈)・ウンドン(今里)
- 二人称代名詞…オシ(仁位・今里・阿連・久田・佐須奈) 親が子にオシという。オメーサマ(ていねいに)(今里)・オメー(今里・小茂田)、
- これだけ…コレシコ(久田) そうだ…ソーヤ、ソージャ
- ください…クデー(仁位) 「フキモンノ(履物を)クデー」「話があるからヨッテクレンデー」
- 誰々…ダッダッ(今里)・ダルダル(佐須奈) 誰がしたか…ダガシタカ(今里)
- さようなら…ザットーナ(豆酸)・シモータカ(豆酸)・ザットーヤ(佐須奈)・ザットナー・ヤット

ナー(仁位) 古語でイザトイ(目が覚めることが早い)からで、翌朝も寝惚(いざと)いことを願う気持ちの表れである。厳原では、人の家を辞去するときに、オイザトナラシヤリマセと言ひ、目下にはオイザトヤという。農村部ではザットエーともいう。

こんにちは…家に入るとき豆酏で、ドーシヨルカ(目下)、ドーシヨルネ(目上)

お上がりなさい…アガランナ(目上に)(鰯浦)・アガランノ(曲)・アガランカ(年下に)(鰯浦・曲)

・アガルマシエッテ(小浦)

敬語の表現として、厳原ではコラルル、コラッタ、ヨマルルのほか、ヨマハルとハルを使う。大河内でもヨマハルという。仁位でも「読まハル」という。

15) 対馬方言の性格

1950年の調査によって見いだした対馬方言の特徴は、次のようにまとめることができる。

① 朝鮮半島の諸方言との関係

金持ちをヤンバン、船をペー、独身をチョンガのように、いくらかの借用語がみられるが、ハングルの言語が対馬方言に及ぼす影響は少ない。バカチという水を入れる容器を鰯浦ではハケと置き換えて使用している。サツマイモの対馬方言コーコイモ(孝行芋)は朝鮮半島の南部ではコグマとなって借用されている。シケーは背負梯子で朝鮮語チゲからという。どちらも似たようなものだという意味のニタカハンガチのハンガチ「同じ」は朝鮮語からである。

② 北九州の方言との類似

北東九州、北西九州の方言との共通性が指摘できる。

終助詞のバイ(尊敬)・サイ(卑語)を用いる。アイ連母音がエーになる。セ・セをシェ・ジェという。上二段活用の「落ツル」、下二段活用の「受クル」が残存している。指定の助動詞に「ジャ」を用い、「ソージャ」などという。

順接助詞のケーを使用する。長崎方言のように伯父を中国語から借用のバポーを用いる。アクセントは、『人文1』の東京班報告のように二拍名詞について2型であることなどが共通している。

③ 「～けれども」を意味する対馬方言の分布

対馬の集落ごとにバツテとケンドンの使用状態が異なることが分かった。

バツテのみを使用する地域…佐須奈・佐護・久和など。

ケンドンとバツテを併用する地域…鰯浦・曲など。

ケンドンとバツテを併用するが、ほとんどバツテを使わない地域…比田勝・鶏知・豆酏内院など。

ケンドンのみを使用する地域…阿連・小浦など。

④ 意味の交替と語形の細分

対馬方言の調査において筆者はフランス言語地理学の成果を参考に、意味の交替と語形の細分について検討した。(堀井令以知執筆「言語地理学」『国語学辞典』所収参照)

ゴテーは対馬方言では、身体の意味で用いるほか、腕の意味になり、手の意味にもなる。

蛇の種類を使い分けは、はっきりしている。ナガムシ(青大将)ヒラクチ(まむし)ヘビ(赤色の蛇)、ヒバカリ(かなり小さい蛇)、アキューリョー(赤くて無毒の蛇)のように細分する。

魚の名についても弁別意識がある。イオ(大きい魚)とサカナ(小さい魚)、エンビ(小さい海老)とエビカニ(伊勢エビ)のように。

筈の名にも種類がある。ショーケ・テボ・スカリ・ミソコシ・カゴ・オーズカリ・ナガテボなど。

風の名について風位の名称に注目したい。アナジ(北西風)、ハエ(南風)、コチ(東風)、ハエコチ・オシャナ(南東風)、ニシ(西風)、オトシャ(疾風)

孫の名は孫・曾孫・玄孫に続くツルマゴがある。(マゴ・ヒーマゴ・ヤシワマゴ・ツルマゴ)

対馬ではかつての武士階級出身と平民出身の言語使用に差異があった。

士族は父をトトサマ、母をタタサマというが、平民は父をトトヤン・トト、母をタタ・カカなどと呼ぶ。

人称代名詞の使用についても男女・階級の差によって使い分けられる。

親類とか親戚の語を使わないでイトコという集落がある。集落全体が親類のような関係で従兄弟・従姉妹同士の結婚も稀ではないからだという。このように社会言語学的研究に資料を提供できる。

海女集落の曲では「海にもぐる」をカツグという対馬一般形にたいして「さあカセゴーヤ」とカセグを使用する。潜ることがカセグことになるからである。

久田村では、炊事中に茶碗を落として割れたときに「カッチョーサマエ」という。この慣用句は歴史とかかわりがある。豊臣秀吉が朝鮮半島に出兵したころ、甲冑をつけた侍がこの地に上陸して村の娘を強姦したことから、甲冑さまに捕まればお仕舞いだということから、茶碗を割ったときにいうようになったと言い伝えられる。『対馬南部方言集』によると、カッチョーという語は人からかわれた時に報いる言葉として「ええ こん(この)カッチョーはまあ」と言い、物を仕損じた時などに「ええカッチョー」という。

⑤ 古語の残存

田畑を耕すことをバルという。沖縄方言でも開墾するのをバルという。墾田というときのハルに結ぶ語で、語頭のp音は古形を保っている。

耳を[mim]、ウサギを[usang]、蟻を[armu]のように発音し、語末の母音を発音しないことも対馬方言音声の特徴として注目される。

広い円谷をいうワム、峡谷のサエ(堀田採・成相採の地名あり)も古語であろう。目を覚ます

をオドロクというが、『万葉集』でオドロクは「はっと目を覚ます」の意味である。このほかネマルが「楽に座る」の意味から「腐る」の意味になって、室町時代から使用され、対馬では「弱る、腐る」の意味で使われている。オラブ(叫ぶ)、アユム(歩く)も『万葉集』に出ている古語である。

敵原や仁位で「来られる」をコラハル、「読まれる」をヨマハルとハルを使うのも、京ことばと比べて興味深い。

対馬方言調査の中で筆者が特に印象に残った集落は仁位であった。調査に訪問した仁位の旧家である長岡家は上代から続く名家で、京都山城国乙訓郡長岡から来たという。仁位の近くの浅茅湾は風光明媚で美しかった。『万葉集』3697の歌「百船の泊つる対馬の浅茅山 時雨の雨にもみたひにけり」と詠まれた浅茅湾付近での方言調査は半世紀を経た今も鮮やかに記憶を蘇らせてくれる。

昭和26年に発表した語彙調査報告は、ごく1部の語彙を取り上げたに過ぎないが、それを1部訂正して『地域社会の言語文化』(昭和63年)に再録した。奥村三雄氏の史的考察(平成2年)には、対馬の豆酏と対馬の他地域の対照がなされているが、語彙全般にわたる調査報告はまだ発表されていなかった。したがって、本稿は昭和25年当時の対馬方言各地の語彙全般を知る貴重な資料といえる。対馬方言の歴史的考察については別にまとめたと思う。

[参考文献]

- 大浦政臣「対馬北端方言集(上・下)」『方言』昭和7年2月・3月
小倉進平「国語特に対馬方言に及したる朝鮮語彙の影響」『方言』昭和7年7月
宮良当壮「対馬方言における特殊音」『音声学会会報』昭和11年9月
堀井令以知「対馬の方言 語彙調査報告」日本文科学会編『人文1 特集対馬調査』有斐閣、昭和26年5月
九学会連合対馬共同調査委員会編『対馬の自然と文化』古今書院、昭和29年9月
永留久恵『古代史の鍵・対馬 日本と朝鮮を結ぶ島』大和書房、昭和50年5月
柳田国男編・滝山政太郎著『対馬南部方言集』国書刊行会、昭和52年11月
堀井令以知『地域社会の言語文化』(第19章 対馬方言の語彙)株式会社名著出版、昭和63年3月
奥村三雄『方言国語史研究』(第三章第三節 対馬方言の史的考察－離島の方言)東京堂出版、平成2年9月